



Title	地域での取り組み：納得いく仕事に付ける仕組み作り
Author(s)	永井, 佳子
Citation	臨床哲学. 2016, 17, p. 167-172
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57583
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

地域での取り組み

——納得いく仕事に付ける仕組み作り

永井 佳子

私の紹介と初めに思ったこと

私は通算すると、10年枚方^{ひらかた}で精神障がい者仕事場兼作業所立ち上げにかかりわり、保健所のグループワークにもかかりわりを持ちました。1990年代ですが枚方で精神障がい者を支援し地域に暮らす施策が始まりました。それに連動しアパート退院という言葉を関係者から聞きました。地域で暮らすための支援に行き場を作ることから始まったようで私はその行き場、さるん作りにかかりわりました。そして、喫茶店が開店すると間もなく陽だまりから身を引きました。

精神障がい者に係った経緯ですが、枚方で感じていたのは、常勤の仕事に行けない人が多く、作業所の収入では生活保護を受けながらの暮らしや、親と同居で経済的に苦しい方が多く、もっと収入が確保できるものはないのか。作業所兼さるんを立ち上げるとき、地域の方との話し合いで感じたのは差別の根強さです。

沖縄に行く機会を与えられたので、差別は今もあるのか？ どう感じ、実際受けることがあるのか。誰もが望む当たり前の普通の暮らしができているのだろうか。そして収入や暮らしの満足度を知りたいと思いました。

訪問した施設

[地域生活支援センター ウェーブ訪問]

利用できる方は、障害者手帳を持っている。自立支援医療受給者証を持っている。障害年金・特別障害者給付金受給者など、平たく障がいを持っている人というので、知的障がい、身体障がい、精神障がい、学習障がいすべてを対象にしている。

支援センターの主な活動は、調理教室班、手工芸班、体験発表班、ボランティア班、体

験発表班、集い班などに分かれています。あらましの説明を聞き当日はピーチパーティーに参加しました。

[ハーネス見学]

活動を始められた経緯を聞く。印象に残ったのは、近所の溝掃除から始めたことや、地域猫の取り組み。活動の中心的考えは、初めに地域がある。そこで地域活動を作り出し障がい者も参加しともに生きる地域社会をめざしている。

発行している「さわやかマンデーかわら版」を戸別に当事者が配布をしている。その時聞いたのは、犬に吠えられて配布が出来ないことがないよう、犬のえさを持って出ている。

[かわら版の役割]

講演会の案内、地域のボランティア活動の案内、カラオケやグランドゴルフなどの案内など読むほどに幅広く掲載されている。この情報で地域の高齢者もいろいろな催しに参加ができる。

[看護大学食堂（エンジェル）]

障がい者団体が運営。壁に掲げてあった理念で感動したのは、次の文章。

「障害のある仲間の就労訓練の場として活用することで一人でも多くの障害を持つ仲間たちの自立と納得の行く社会参加につなげていけるよう努めていきたいと考えています。看護職従事者を育てる大学内食堂の運営を通じて、精神科に通院している仲間たちの働く姿を見ていただき交流を図りながら、精神症状の理解をすることで、将来看護職に就いた時に偏見を持たずあらゆる視点から精神科に通院・入院している仲間たちを看護してほしいと思います。」

食堂エンジェルの紹介

私たちの運営する食堂エンジェルでは、看護学生、教職員の皆様はじめ、利用して頂く方々のニーズを積極的に取り入れ、心から満足していただけるメニューやサービスを提供することを目標としています。あわせて、食堂エンジェルを障害者総合支援法の趣旨を活かし、障害のある仲間たちの就労訓練の場として活用することで、一人でも多くの障害を持つ仲間たちの自立と納得のいく社会参加につなげていけるよう努めています。看護職従事者を育てる大学内食堂の運営を通じて、精神科に通院している仲間たちの働く姿を見ていただき交流を図りながら、精神症状の理解をすることで、将来看護職に就いた時に偏見を持たずあらゆる視点から精神科に通院・入院している仲間たちを看護してほしいと思います。



ふれあいセンターグループ
(有)ハートン/食堂エンジェル

とても合理的で一団体だけでは人集めに行き詰る可能性もあるが、緩やかな共同で事業所から数人ずつが出て多くの参加で運営され理念にある納得行く社会参加が出来ているのだろう。働くフィールドが看護大学というのも環境が良いと思う。改めて障がいを理解してと言うことなく日々のふれあいで理解が進み偏見も無くなっていくんだろうと思った。

[ふれあいセンター]

ここでは就労の場というので皆さんのが仕事などを聞いた。

作業内容：くろねこやまと短時間配達、看護大食堂、パン焼き、もやしのひげ切、袋詰め、パソコン、等。

時給300円 人によるが 障害年金、生活保護

一か月の目標を話し合ってそれぞれが決める。目標が達成できたら報奨金3,000円をもらえる。18日作業所に来る、のがこの条件らしい。

夕方は読書会に参加した。

[スオウの木]

西表にある作業所で自然に囲まれ素敵なところでした。西表の港にスオウの木の観光販売所がありました。自然の恵みの農作物、特産品等を販売していた。作業所では販売員の挨拶を練習してましたが、まだ今はここで販売に係るメンバーはいないということでした。

[作業内容と問題点]

- ・ 作業は大学の実験に使うという芝の苗つくり。
- ・ お土産店で販売するクリップなどの制作。私たちが参加した藁の心だけを抜く作業。これで箒を作るそうです。
- ・ ネットで見て驚きましたが年間売上1,000万円あると。自然に恵まれた観光地であること。
- ・ イリオモテヤマネコの足跡を採集し粘土で焼き物にしまグネットとして販売しているが、製作が追い付かないうえ、今はできるメンバーがいないということだ。
- ・ 精神障がいの皆さんの体調や状況によって製品としてなかなかでき上がらなかったり、できなくなったりで、商品として出す難しさがある。

[株式会社 ゆにばいしがき]

企業理念で以下の目標を掲げておられた。

- ・ ユニバーサルデザインのまちづくりの実現を！
- ・ 障害の有無を問わず、あたり前の生活の実現を！

- ・ 子どもからお年寄まで、地域社会の一員として支えあい、学びあう完全なるインクルーシブ社会の実現を！
- ・ 高いクオリティとオリジナルティーを追求し、地域から評価される価値ある会社の実現を！
- ・ 地球に、島に優しい農業と循環型社会の実現を！

そこには、意気込みがうかがわれた。

私が感動したのは、広い土地に案内され、「段差のない平地だから購入したこと。車いすでも仕事ができる環境にしたかった」と障がいも、高齢もこだわらないすべての働く意欲のある人は受け入れたいと積極的な姿勢に感動をしました。その後、津嘉山さんから話を聞き施設の見学をしました。

活動体の立ち上げの違い

●最初に地域があつて活動があること。枚方で精神障がい者作業所「陽だまり」始めようとしたとき、まず地域の方との話し合いがありました。そこでは無理解による偏見からくるいろいろな差別の話が飛び交っていました。日常の平凡な暮らしに不安な団体が来るというので暮らしを守るため排除したい力が働いたと思います。

●沖縄で耳にしたのは地域があつて（当然ですが）地域にないもの、必要な働きを生み出し、またはつくり精神障がい者も一緒に参加するというので自然に協働が組まれ障がいの理解も大上段に構えることなくスムーズに進められている。草の根からの働きで方法の違いを知った。

情報の共有による利点

次に瓦版では多くの作業所、団体が障がいにこだわらず情報を流し共有されていること。また地域にも情報は流されて、いろいろな催しがバリアフリー化していること。参加したカラオケでは地域の高齢者も一緒に参加していた。これがグランドゴルフ、ボーリングなども同じで大会までも行われている。

多くの団体も情報の共有、作業の共同、から団体の協働で大きな仕事の獲得が看護大学の食堂（エンジェル）の協働事業のように広がりを感じた。またどこの作業所に所属して

いても作業によっては外部に出て行われるので、人の交流もあり個々の皆さんのストレスも軽くなるように思う。それこそが納得のいく社会参加ではないか。大阪では団体や一作業所で作業内容に応じた設備などあるが独立しそれぞれが作業を行っているので作業内容も限られているように思う。

海産物に恵まれ観光県であること

次にうらやましいと思うのは観光県であるということだ。製品も海に出れば採集でき、販売に利用できることは参加されるみなさんの負担も軽いのではと思った。

まとめ

沖縄でもちろんすべてではないだろうが、多くの障がい者団体がつながり組織化されているので、参加している団体に仕事を外注するにも、安心感を与えるのではないか。また障がいのみなさんも、一作業所で働く人の確保を案ずることなく余裕のある配置で緩やかな参加が出来、働く側にも安心感が持てるのではないか。その成果が大学の食堂や港のお土産もの売り場につながっているように思う。

日常の暮らしは、次のようだった。

- 障がい者団体が月4回瓦版を発行し、情報交換、参加の案内などを一般の人の家にも個別に配布し広報している。だれでも参加できることは、取り立てて障がいということにこだわらない自然な関係を生み出しているのではと思った。
- グランドゴルフ 障がい者団体で大きな場所を借り多くの一般のチームに参加を呼び掛け、大きな大会になっている。障がい者、一般の人とともに楽しんでいる。
- その他に、ボーリング大会 カラオケなど

今後の課題

沖縄でも「病院を退院し地域に住む」を進めているがなかなか進まないそうで、30数年病院に入っていた方が、テレビのチャンネルを押すだけでいいと言うので驚いたり、戸惑つたりされた。この話を聞き変わらない面もあることも理解できた。

おまけ：個別に聞いたこと（ウェーブで）

- Aさん 学校で癲癇と診断され仕事に就いたことはない。両親を最後まで介護し、現在一人暮らし。作業所では貝殻で小物つくりをしている。
- Bさん 元運転手。人を笑わせることが好きで集まつては酒を飲み楽しんでいたのが、アルコール依存症になったきっかけで、今はアルコール依存症になって良かった。ここに自分が参加した日、しない日の雰囲気が違う。ムードメーカーとしての役割を自負されていた。
- Cさん 物静かな方で家族と同居。ビーチパーティーで皆がしり込みする中でスイカ割りに挑戦された。
- Dさん 大阪にも住んだことがある女性で、兄弟の中の唯一女の子。親に呼び戻された。末っ子で大事にしてもらった。今はパン作りに参加している。
- 親の介護で沖縄に帰ってきたが、親が亡き後もここに決めた。一週間が忙しく、カラオケ、グランドゴルフその他にもあって毎日が退屈しない。川崎に帰っても友達と温泉ぐらいは行くけどあとは何もない。